

32
2022.5

薬友会報

千葉大学薬友会



薬友会長・研究院長ご挨拶	2
医学薬学府副学術長ご挨拶	2
新任のご挨拶	3
薬学部この一年	4
会員便り	6
研究室便り	11
クラス通信	13
支部便り	15
サークル紹介	15
学部だより	16
教員の人事異動	16

第107回 薬剤師国家試験合格状況	16
2021年度 卒業生・修了生の進路	16
2022年度 薬学部入学者の状況	17
2022年度 大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)	17
2021年の受賞記録	17
薬友会より	19
第30回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー 宮木高明記念講演会開催のお知らせ	20
薬剤師卒後教育研究講座開催のお知らせ	20

薬友会長・研究院長ご挨拶

森部 久仁一



薬友会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。令和4年4月より2期目の薬学研究院長・薬学部部長を拝命しました。まずはコロナ禍での状況を紹介します。千葉大学では令和3年度からCOVID-19ワクチンの職域接種を実施しており、薬学部教員が業務に協力しています。教育に関しては、感染防止対策を施した上で対面授業とメディア授業（同時双方向型、オンデマンド型）を授業形態に合わせ併用して実施しています。講義室の収容定員は60%（令和3年度は50%）で、120周年記念講堂をフル活用して可能な限り対面授業を実施しています。研究室での研究活動は、感染防止対策を施した上で研究室毎に工夫しています。研究成果の発表の場である学会はオンライン開催が殆どです。就職活動もオンラインが主流で学生も対応には慣れている一方、対面で発表や質疑応答する機会が限られるのが残念です。懇親会やコンパを含む人的交流も、以前の状況に戻すには時間がかかりそうです。

次に最近の主な動きを紹介します。令和3年度中山俊憲学長より、教育・研究に対する大学の方針が示されました。大学の財政は以前から厳しい状況が続いています。文部科学省からの予算配分の一部は大学の成果を中心とする実績状況に基づくものとなっており、教育・研究に関する実績を他大学と競争しています。部局では科研費を中心とした外部資金の獲得や博士人材の輩出などが従来以上に求められます。また、令和4年度から第4期中期目標期間が始まります。大学ごとに評価指標を定め期間内での目標達成を目指します。研究に関しては、大学に国際高等研究基幹が設置され、若手中心の研究プロジェクトの推進や若手人材の育成が行われます。薬学研究院の教員も研究プロジェクトへの参画や、全学研究センターの運営に従事しています。科研費や競争的資金の獲得でも各教員が積極的に取り組み、AMEDやCRESTといった大型資金の獲得に至っています。人事に関しては、令和4年3月末に薬物学研究室の秋田英万教授が退職され、4月には畠山浩人先生が同研究室教授として着任されました。亥鼻地区の施設整備に関しては、令和3年度の医学系総合研究棟竣工に続き、令和4年度には災害治療学研究所施設が医薬系総合研究棟2期棟の傍に竣工予定です。道路拡張整備も進み、キャンパスの様相も毎年様変わりしています。薬友会に関しては、令和3年度はオンラインによる生涯教育セミナーを実施しました。本年度は、対面とオンライン併用のハイブリッド形式での実施を予定しています。教職員一同、今後もニューノーマルでの活動を目指し尽力して参ります。薬友会員の皆様のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

医学薬学府副学府長ご挨拶

伊藤 晃成



できています。

コロナ禍の中、副学府長として2年目を迎えました。昨年6月には、例年対面で行っている大学院入試説明会を初めてオンラインで開催しました。研究室紹介は各自で作成した動画の事前視聴で、説明会当日はオンラインで私と大学院教育委員長の2名のみで説明と質疑に参加しました。参加者に非常に好評だったこともあり、今後も原則としてオンラインでの説明会実施を予定しています。大学院入試は例年通りに8月と1月に滞りなく行われ、今年度4月からは新たに修士課程45名、後期3年博士課程10名、博士4年課程3名を迎えることが

さて、千葉大学は昨年度、国立研究開発法人科学技術振興機構の次世代研究者挑戦的研究プログラムに応募し、「全方位イノベーション創発博士人材養成プロジェクト」が採択されました。このプログラムに採用された学生は17万円/月の生活費に加え、特別研究費として50-150万円が支給されます。薬学領域からは26名の博士課程学生が採用され（R3年度末時点）、彼らへの支給が始まっています。採用された学生は、セカンドメジャー、つまり別分野での成果を求められます。例えば、自研究室から外に出て挑戦的・融合的な研究を実施することなどがこれに相当します。講義や学会がオンライン中心になったことを除き、研究室の活動はほぼ通常状態に戻りつつあります。時間や場所の制限なく学会や講義に参加できる点では、むしろ研究の効率は上がっていると言ってよいかもしれません。今の流動的な状況を好機と捉え、異分野参入も含め様々なことに挑戦してほしいと考えています。

昨年度は、修士課程49名、後期3年博士課程15名、博士4年先端医学薬学専攻4名が修了しました。世界最高水準の研究と教育をめざす千葉大学にとって、大学院生を中心とした研究活動の活性化、維持は極めて重要です。学生が安心して活躍、成長できる場を提供していきたいと考えておりますので、引き続き薬友会会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

*昨年末に学府HPがリニューアルされました (<https://www.m.chiba-u.jp/dept/gakufu/>)。スマートフォンにも対応していますので、是非ご覧ください。

新任のご挨拶

畠山 浩人



令和4年4月1日付けで、千葉大学大学院薬学研究、薬物学研究室の教授を拝命いたしました。薬友会報の紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。半世紀以上にもわたり、薬剤学や薬物動態学の研究領域を中心に著名な先生方を輩出した伝統ある研究室を引き継がせて頂く機会を得て、心より感謝致しますとともに、責任の重さを感じ身の引き締まる思いです。

私は2003年3月に北海道大学薬学部を卒業、同大学院に進み、原島秀吉教授の下でドラッグデリバリーシステム（DDS）を用いた核酸医薬分子の細胞内や体内動態制御と疾患への治療を目指した研究に従事しました。この間、薬物学研究室の前任教授である秋田英万先生（現・東北大学薬学研究科教授）に直接指導いただきました。2008年に学位を取得後も、原島研にて特任助教として5年半研究教育に従事する機会を得ました。その後、2013年より2016年まで米国テキサス大学MD Anderson Cancer Centerの婦人科腫瘍学分野のAnil K. Sood教授の下で、博士研究員としてがん生物学、温熱治療、免疫療法に関わる研究に携わりました。

2016年1月よりテニユアトラック助教として臨床薬理学研究室に着任し、樋坂章博教授の下で免疫チェックポイント阻害剤の薬物動態の特性が薬効に及ぼす影響など、近年期待が高まっているがん免疫療法に関して薬学的観点からの研究を開始しました。2019年10月にテニユア取得に伴い准教授に昇任、2022年4月より秋田先生の後任として薬物学研究室教授に着任しました。

新型コロナウイルスに対するmRNAワクチンは、従来のワクチン開発の常識を覆す速さで実用化されました。これには核酸医薬やDDSが重要な役割を果たしています。これまでの様々な分野での研究経験を活かし、薬剤学や薬物動態学の領域の研究教育を通じて、次世代の医薬、new modality（新しい治療手段）に強い人材を育てていくことが私の使命であると考えています。

研究室の運営のみならず、薬学研究院の発展に貢献できるよう努力して参りますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

全方位イノベーション創発博士人材養成プロジェクト

伊藤 素行

千葉大学は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が公募した「次世代研究者挑戦的研究プログラム～博士後期課程学生の挑戦を支援する～」に採択されました。本プログラムは、既存の枠組みを越えて博士後期課程学生の自由で挑戦的・融合的な研究を支援するとともに、学生が研究に専念できる環境を整備し、併せてキャリアパスの支援などを行うことで、優秀な博士後期課程学生を多様なキャリアパスで活躍できる博士人材へと導く事業です。これを受けて、千葉大学では学長を事業統括とした「全方位イノベーション創発博士人材養成プロジェクト」を2021年10月に開始し、博士後期課程の全専攻から総勢150名のプログラム生を選抜しました。プロジェクト生には、月額17万円の研究奨励金(生活費相当)に加えて、年額上限150万円の研究費を支給するとともに、様々なキャリアパス支援に向けた取組を行っています。医学薬学府薬学領域においても20名程度のプログラム生が選ばれました。これにより、我が国の超高齢少子化や大規模災害等の課題、新規感染症等の人類共通の課題に迅速に対応し、様々な研究分野でイノベーションを創発する博士人材を養成していきます。

社会の期待に応える人材育成を見据えた薬科学科の現状と展望

薬科学科長 小椋 康光

2006年の薬学教育6年制の導入から12年間の移行措置を経て、2018年度入学の薬科学科学生からは、薬剤師国家試験を受験することはなくなりました。文部科学省のwebsiteには「4年制学部からは、大学院へ進み、製薬企業や大学で研究・開発に携わる人材をはじめとして、薬剤師としてではなく、薬学の基礎的知識をもって社会の様々な分野で活躍する多様な人材が輩出されることが期待されています。」と記載されています。この“期待”に応えられる人材育成を目的として、千葉大学薬学部では魅力あるカリキュラムの構築を行っており、以下にその一部を紹介いたします。

～研究力強化に向けた薬科学科学生のための科目新設について～

根本 哲宏

2018年度以来、後期入試を経て薬学部に入学者は、1年次より薬科学科の学生として大学生活をスタートしている。後期入試組の学生は、推薦入試組、前期入試組の学生と比べてカリキュラム面の制約が少なく、学生生活における時間的な自由度も高い。この点に加え、何より、研究者になることを目指し薬科学科に直接入学してきた学生達の心意気にも応えるべく、基礎系分野の教員を中心にワーキンググループを組織して、彼ら、彼女らの研究力を伸ばし、千葉大学薬学部を研究面で活性化していくための取り組みについて議論を進めてきた。その一環として、2021年度入学生から、研究力強化に向けた薬科学科学生のための科目として「薬科学研究概論」を新たに開講し、薬学部の基礎系研究室の最先端研究の内容や研究室の雰囲気や2年次から体験できる機会を提供している。これに加えて、2020年度入学生から先行して開講する「社会で活躍する薬学研究者」により自身のキャリアプランを思い描きつつ、2018年度入学生から開講の「薬科学科基礎演習I」「薬科学科基礎演習II」によって、各学生の希望に応じ1、2年生から実践的な実験や研究体験を行うことが可能になっている。

～「社会で活躍する薬学研究者」の開講について～

東 顕二郎

学部2年生を対象とした本講義では、製薬、化粧品、化粧品、食品企業で研究開発に携わっている非常勤講師（主に千葉大学薬学部・大学院医学薬学府の卒業生・修了生）から、業務内容やその意義、日々のスケジュールなどについて紹介頂く。開講初年となった本年度はCOVID-19の影響で生憎のオンライン講義となったが、総勢16名の講師から約30分ずつ講演頂いた。通常の講義とは違った活気があり、将来のロールモデルである各講師からの話に、学生全員が目を爛々とさせ受講していた。学生時代の実体験（失敗談も）を基にしたアドバイスも多数あり、学生達にとって進路や学生時代の過ごし方を考えるための大変貴重な機会となった。講義毎のレポートには感想や質問がA4用紙を埋め尽くすほど書かれており、中には「本講義を受けて将来の研究分野を決めた！」というものもあった。本会報をご覧頂いている皆様の多くが「社会で活躍する薬学研究者」であり、次回以降の講師の依頼があった際には是非お引き受け頂きたい。COVID-19が落ち着いた暁には対面講義を実施する予定であり、学生との直接対話を通して薬学研究者の魅力を存分にお伝え頂きたいと思っている。

大型研究プロジェクトの紹介

CREST 「インセルNMR計測による細胞内蛋白質の構造・動態・機能解明」

研究代表者：西田 紀貴

細胞内のタンパク質は分子混雑環境や細胞内ネットワーク、局在化などの影響によりin vitro（試験管内）とは異なる構造や活性を示すことが分かってきました。私たちのグループはこれまで細胞内環境下にあるタンパク質の構造を原子レベルで観測することのできるIn-cell NMR法の開発に取り組んできました。本CRESTではこの手法をさらに発展させ、細胞内タンパク質の構造ダイナミクス、細胞内制御因子との相互作用、細胞内局所環境における観測を可能とする新しい手法の開発を行います。開発した手法を細胞内で環境依存的に形成される高次構造体の構造解析へと適用し、その機能解明を目指します。

AMED-CREST 「難治性感染症制御に資する細菌持続感染機構解明と

次世代型抗感染症化合物の創出」 研究代表者：高屋 明子

世界中を悩ませるCOVID-19は、私たちに感染症に対抗する手段を備えておくことの重要性を再認識させました。最も強力な感染症への対抗手段は、治療薬です。細菌感染症の治療薬として多くの抗菌薬（抗生物質）が見出され使用されていますが、近年、既存抗菌薬が効かない耐性菌による感染症の増加が深刻な医療問題となっています。この問題に立ち向かうべく、細菌学・有機化学・情報科学・免疫学の多分野横断型の研究プロジェクトを開始しました。本研究では、抗菌薬や宿主免疫などの過酷な条件に曝された病原細菌の表現型に着目し、感染症治療薬の新たな標的を見出します。新たな標的に対するスクリーニングに系を構築し、本学部に長年蓄積された化合物を中心に活性化化合物の探索を重ねることで、薬剤耐性菌感染症にも対抗できる未来の抗菌薬のシードとなる化合物構造の創出を目指しています。

プレスリリースされた薬学部の研究

2021年の千葉大学からプレスリリースされた薬学部の研究について紹介いたします。これに限らず各研究室の研究成果について積極的に発信していますので、研究室HPをチェックしてみてください。

- 2021年1月5日 「地球に優しいキラルカルベン発生法を開発 安定なベンゼンの不斉脱芳香族化を実現」薬化学研究室 原田慎吾、根本哲宏
- 2021年3月19日 「治療薬を包含した高分子ミセルの相互作用場を解明！優れた薬物送達メカニズム理解への新手法」製剤工学研究室 東顕二郎、森部久仁一
- 2021年7月5日 「植物感染性線虫の誘引物質の同定に成功 一年間数十兆円の農作物被害がある線虫のトラップ剤開発にはずみー」中分子化学研究室 石川勇人
- 2021年9月16日 「高齢者の加齢による肝臓の薬物処理能力の変化を初めて明確に 臓器の重量と血流量に比例して40歳から年に0.8%低下」臨床薬理学研究室 樋坂章博
- 2021年9月29日 「免疫の抑制系が医薬品による副作用発症をコントロールすることを発見」生物薬剤学研究室 青木重樹、伊藤晃成
- 2021年10月13日 「機械学習によるヨウ素の結合エネルギーの予測 従来法の1.3億倍のスピードでの予測に成功」薬化学研究室 中島誠也、根本哲宏
- 2021年10月29日 「生体内で安定して機能するアスタチン-211標識法を開発 より有効で安全な核医学治療への応用に期待」分子画像薬品学研究室 鈴木博元、上原知也

会 員 便 り

井畑 研二（武田薬品工業株式会社 日本開発センター）

1999年に薬学部入学し、衛生化学研究室で修士課程までお世話になりました。研究室では鈴木和夫先生、小椋康光先生、鈴木紀行先生の指導の下、研究に楽しく勤めました。小椋先生とは亥鼻キャンパス引越しの際に徹夜で作業したことが良い思い出です。

私は現在、製薬会社で臨床開発業務に従事しており、主にCRO（臨床開発業務受託機関）のマネジメントを担当しています。内資企業の日本開発センターという組織に所属していますが、研究開発の拠点はUSであり、GlobalのProjectチーム中心の働き方が根付いているため「Global開発の一翼を担っているFunctionの集まり」という意識が強い組織です。このため、開発の進め方もGlobal開発を効率よく進めることの優先度が高くなります。海外の手法に足並みを揃えることは、時に日本にとってはサイズの合わない服を着せられているようなやり辛さを感じるもので、葛藤を感じることも多々あります。

近年、臨床開発の業務でも、IT技術の導入により、患者が治験施設への来院に依存せずにデータ取得する方法が検討される等、治験の手法一つとっても新しい挑戦があり、苦勞することも少なくありません。しかし研究室で先生方・仲間と共に知恵の輪を解くように過ごした研究生生活を思い出すと、今後の仕事での挑戦も乗り越えていけるような前向きな気持ちになります。

（平成17年修士課程修了）

金沢 直樹（富士フイルム富山化学株式会社※）



学部4年生から修士2年まで荒野泰先生が主宰する分子画像薬品学研究室にてご指導いただきました。卒業後、富士フイルムRIファーマ（現富士フイルム富山化学）へ入社し、CMC研究者として入社から3年間は放射性医薬品の製造プロセス・試験法開発に携わりました。その後、2018年より親会社である富士フイルムへ出向となり、DDS製剤の処方設計・プロセス開発に携わった後、2020年に再び現職に戻ってまいりました。研究の中でも生産・開発寄りの分野となり、学生時代に毎日夜遅くまで没頭した基礎研究から離れてしまったことを寂しくも感じますが、基礎研究の成果を実用化・商業化につなげる橋渡し役として非常に重要な分野であり、日々やりがいを感じながら仕事に励んでおります。身の回りの環境・研究内容に変化があった一方で、大学での研究を通じて繰り返したトライ＆エラーや物事の「なぜ？」を掘り下げていくプロセスは今まで経験したどの仕事においても変わらず求められ、研究室生活での経験は出向等で環境が変わっても活かすことができ、一緒に働く多くの方々から信頼を得るきっかけになったと実感しています。本年、会社都合でまた新たな環境となりますが、今までの経験を活かし、仕事を通じて多くの方々から信頼されるよう精進していきたいと思っております。気軽に顔を合わせ、大勢で集まり、お酒を酌み交わすのが難しい時代となってしまいましたが、いずれ情勢が落ち着いて以前の日常が戻ってきたとき、お世話になった先生方・同窓生の皆様とお会いできる日が来るのを楽しみにしています。

※会社都合により、発行時点での所属は「PDRファーマ株式会社」となります。

（平成27年修士課程修了）

片川 和明（湘南医療大学薬学部・准教授）



2000年4月に相見則郎先生の主宰されていた生体機能性分子研究室の門をたたき、高山廣光先生のご指導のもと、高山体制最初の博士課程修了者として2005年に学位を取得しました。高山先生からかけていただいたいくつかの言葉は、今も私を突き動かす原動力になっているように思います。現中分子化学研究室を主宰されている石川勇人先生は、1学年上の先輩で旧知の仲です。研究室の名前は変わっても、伝統あるアルカロイドケミストリーが継承されていること、戻る場所があることを、1修了生として大変うれしく思っています。製薬会社勤務を経て2006年に大学人となった後、国際医療福祉大学では渡邊敏子先生、武蔵野大学では熊本卓哉先生と二人の薬品製造学研究室の先生方にもお世話になりました。昨年4月からは、新設された湘南医療大学薬学部に着任し、准教授ながら天然物化学研究室を主宰させていただいています。とは言っても、スタッフは未着任、学生の配属はしばらく先になりますので、まさに孤軍奮闘状態です。浅学の身ではありますが、生体機能性分子研究室だけでなく薬品製造化学研究室の流れもくむ当研究室を発展させるべく、精進して参る所存です。幸い本学は東戸塚駅から徒歩圏のアクセス良好な立地にあります。先生方はもとより、先輩後輩の方々に気軽に越えただければ幸いです。

（平成17年博士課程修了）

桑原 周平（バージニア大学 医学部腎臓内科 ポスドク研究員）



私は学部4年から博士3年までの6年間、生化学研究室にて伊藤素行先生にご指導いただきました。現在はアメリカのバージニア大学でポスドクとして急性腎障害の研究に従事しております。博士課程を修了した昨年までは脳科学領域の研究を行っていましたが、現職では分野を変え、腎臓学、神経免疫学を専攻しています。アメリカでの生活はわからないことだらけで困難の連続ではありますが、伊藤研で培った知識や経験をフル活用しながら日々楽しく研究ができています。学部・研究室時代の友人とは今でも連絡を取り合っていて、これもまた私のアメリカ生活の大きな支えとなっています。

大学入学から今年でちょうど10年が経ちますが、こうして振り返ってみると、同年代の仲間とともに目の前の研究に没頭できていた学生時代は私にとってかけがえのない時間でした。コロナ禍で何かと窮屈なご時世ではありますが、在学生の皆さまにもぜひ今の研究環境を思う存分楽しんでいただけたら幸いです。私自身も千葉大学の恩師や友人からいただいたご恩を少しでも社会に還元できるよう、今後も研究に邁進したいと思います。
（令和3年博士課程修了）

田村 慎司

私は薬化学研究室で濱田先生・根本先生のご指導の下で有機化学の研究に携わり、2009年に修士課程を修了しました。その後、医薬品製造プロセスを検討する研究員として製薬企業に入社しました。企業で働く私が様々な困難に直面した際に支えになったのは、研究室時代に得た知識と経験でした。現在は医薬品の品質に関する薬事業務に従事し、申請資料の作成や規制当局からの照会事項への対応業務をしておりますが、研究室で学んだ有機化学の知識のみならず、学生時代に学んだ分析化学、薬機法、局方などの幅広い薬学の知識が今の自分の血となり肉となっていると実感しています。また、薬づくりのゴールである承認申請業務に従事することで様々な分野の知識が集まり医薬品が世に出るということを再認識でき、医薬品の開発における薬学教育の重要性を改めて感じています。千葉大学薬学部での学びを生かし、一日でも早くこれまでに類をみない新薬を患者さんの元に届けることができるよう、今後も尽力していきたいと思っています。

コロナ禍はみなさんの生活に大きな影響を与えたと思います。一方、医療現場の最前線で人の健康やいのちを守るために奮闘されている方々のおかげで今の生活が成り立っていることを改めて認識する機会になったのではないのでしょうか？自身も製薬企業で働く者として、人々の健康に貢献できるように邁進していきたいと思っています。
（平成21年修士課程修了）

泉水 友洋（マルホ株式会社・研究部）



学部3年未から修士2年の間、免疫微生物学研究室（旧微生物薬品化学研究室）に所属し、川島博人教授より丁寧かつ熱心にご指導頂きました。現在は研究員として製薬企業で薬理研究に従事しておりますが、右も左も分からなかった私に生化学の面白さ、糖鎖研究の奥深さを教えて頂いたことが、研究者としての基盤になっています。研究テーマとして、糖鎖に対する抗体の樹立とその解析にチャレンジさせて頂き、大量の抗体をスクリーニングした研究室での日々を昨日のように思い出します。

さて、大学院を卒業して現在社会人3年目となりますが、来年度からは博士課程に進学した研究室の同期が私の勤めている会社の同じ部署に入社する予定です。さらに、修士時代に参加した実験が最近論文化されたとか伺い、現在でも研究室との繋がりを感じています。社内や業界にも千葉大の先輩方や知人が多数いて、日々刺激を受けております。就職に伴い、千葉から関西（京都）へ引っ越したのですが、場所が変わってもこのような繋がりがあつた事を大変ありがたく感じています。

コロナ禍ということもあり、なかなか大学時代の同期や知人に会えず寂しいところではありますが、いずれ訪れるコロナ終息の際には会社や研究でこんな成果を出したと報告できるよう日々業務と研究に邁進したいと思います。
（平成31年修士課程修了）

天児 由佳 (ハーバード大学化学科)



私は薬品合成化学研究室で西田篤司先生と荒井秀先生からご指導を受け、2017年に博士号を取得したのち、現在までハーバード大学化学科のChristina Woo先生の研究室でポスドクとして働いています。最初は薬剤師になろうと考え薬学部に入りましたが、なんとなく研究の方が面白そうに思えて薬科学科に進学し、せっかくだから人生修行でも、と思いきやと噂の絶えなかった薬品合成化学研究室の門を叩き、優秀な同級生、先輩後輩に揉まれ、気づけばどっぷりと研究の世界にはまっていました。

研究を続けるか悩んだこともありましたが、博士号取得後は心機一転何か新しいことを、と思い留学を決めました。当初は2、3年と思っていたポスドクも5年目が終わろうとしています、長く在籍した甲斐もあり最先端のケミカルプロテオミクスを学ぶ機会に恵まれ、この春からBristol-Myers Squibbのプロテオミクス部門で研究員として働くことになりました。アクティブな研究環境に魅了され、すっかりアメリカに居着いてしまっています。

アメリカのトップスクールでポスドクなんて務まるだろうかとビクビクしながら留学を開始しましたが、薬品合成化学研究室でご指導いただいた基礎は存分に通用し、千葉大学での学びに感謝する日々です。大学入学当初は想像もしなかった道を歩んでいますが、これからも新しいことを恐れず日々精進していきたいと思っています。(平成29年博士課程修了)

倉田 直希 (住友ファーマ株式会社)



感染状況が落ち着いていた昨年11月末、薬効薬理学研究室の級友である西野君と東京での食事を終えて解散しようとしていたとき、偶然にも同研究室の中村教授から西野君宛に電話がありました。中村教授と同研究室の後輩が千葉で食事をしているとのことで、今となっては経緯が不明ですが西野君に代わり私が千葉に移動し、当時や現在の研究室の話で中村教授や後輩と盛り上がりました。1日で級友・恩師・後輩に会い、学生時代の思い出が一気に甦った日になりました。このご縁で今回寄稿の機会を頂いた次第です。

さて、私は2017年に修士課程を修了後、2度の転職を経て、現在は住友ファーマ株式会社(旧:大日本住友製薬株式会社)でメディカルライターとして医薬品等の申請や臨床試験に関連する文書の作成に従事しています。計画・結果・解釈を読者に紛れもなく伝えるために、ライティングスキルを涵養する日々を過ごしています。

話は戻りますが、5年の社会人生活の中で転職を繰り返すことになるとは学生時代の私は全く想像していませんでした。しかし、仕事を通じて見出せたやりたいことに基づき転職という選択肢を思い切って選べたことは、自分の社会人生活に大きなプラスになったと感じています。近年は様々な要因によりワークスタイルやライフスタイルの変化を余儀なくされている状況ですが、この社会潮流に呑まれないように、自分ができること・やりたいことをこれからも模索していきたいです。(平成29年修士課程修了)

前田 悠佑



私は学部4年生から6年生まで病院薬学研究室(現・医療薬学研究室)でお世話になりました。現在に至るまでの社会人としての下地は、北田光一先生、石井伊都子先生をはじめ研究室の先輩、後輩の方々に作って頂いたと思っています。地方総合病院で薬剤師として勤務した後、青年海外協力隊の薬剤師ボランティアとしてマラウイ共和国で活動してきました。

マラウイは教育や医療資源の不足等で医療レベルがまだ高くないことも事実で、最新の医療知識や技術よりもむしろ基本的な医療がより必要とされる場所でした。また、異文化の中で戸惑いもありましたが、それがまた面白いところでした。例えば、マラリアやエイズが風邪や肺炎と同じくらい多いこと、国内貧富の差と持たざる者に分け与えるシェアの文化、職場のキッチンで作る大皿料理等。基本的な医薬品であるアモキシシリンやガーゼなどが欠品した時には衝撃を受けましたが、彼らにとっては日常茶飯事であり、やはりそこに絶対的な資源不足も感じました。

現在は日本に戻り、改めて日本の臨床現場や研究開発、教育など様々な形で医療に貢献している方々のことを心から尊敬していますが、開発途上国などの他国で医療に関わることもまた大事な活動だと思っています。薬友会報で千葉大学入学者全員に卒業までに海外留学が義務付けられたと知り、学生にとって異文化交流や研究留学の絶好のチャンスだと感じました。(平成24年卒業)

寺田 勝英（高崎健康福祉大学 薬学部長）



1974年4月に製剤工学研究室に卒研生として配属し、修士課程を修了した後、そのまま助手として1986年6月までお世話になりました。恩師の仲井由宜 教授に指導を受けたことがその後の研究の基礎になったと思います。その後、私立大学、製薬企業を経験して1996年から東邦大学薬学部にて20年間勤務致しました。東邦大学では固体医薬品の物性研究を中心に行なってきましたが、製薬企業での経験も研究の展開に大いに役立ったと思います。大型放射光施設 Spring-8、固体NMR、ラマンスペクトル、テラヘルツなどを用いて原薬の性質や製剤工程で生じるさまざまな現象を分子レベルで研究してきました。製薬企業や分析機器メーカーの協力を得て充実した研究生活を送ることができました。2016年に東邦大学を定年退職する時に高崎健康福祉大学からお誘いがありました。

現在は新幹線通勤の毎日です。高崎健康福祉大学薬学部は2006年に新設（初代学部長：宇井理生 先生）された群馬県唯一の薬学部で、1学年90名の少人数教育を特徴としています。最近では講義の中で本大学の理念とは、などと今まで思ってもみなかった内容の授業を行ったり、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの定期的な検証など、これまで避けてきた業務に四苦八苦しています。学術論文を読むことよりも、薬事日報の大学に関する記事に一喜一憂する毎日です。

ちなみに千葉大学の理念は「つねに、より高きものをめざして」とあります。同窓生の皆様のご活躍を願っています。

（昭和52年修士課程修了）

加藤 美樹（東京大学・研究員）

夜の新宿駅で久々にメールボックスを見たら、恩師石橋正己先生に、薬友会報の会員便りの打診を頂いているのを発見し、懐かしさと先生に少しでも恩返しができる喜びで、目頭が熱くなったのを覚えています。私が学部4年生の夏に教授として赴任された石橋先生のご指導の元、2000年に修了後、大正製薬株式会社にOTC部門の研究職として18年余り勤務して参りました。結婚出産育児の中、研究を続けていましたが、早期退職制度をきっかけに、「がん研究を大学で勉強したい」と思い博士課程入学を決意。今考えると無謀な話でした（笑）。週5日学生、週1日調剤薬局パート、学童お迎えからの徹夜3連チャンは、体がもちません。それでも何とか博士論文を提出できたのは家族や大学の先生、同僚の支えは勿論のこと、これまでの研究と全く分野違いの進学を決める前に石橋先生に相談に行った時に、「大学は学ぶところ。」と励まして頂いた言葉に支えられました。三年間の博士課程を通して、アカデミアでの研究の厳しさや楽しさ、様々な環境の中で勉強する学生、働く技術員の方々、パート先での調剤薬局業務など、会社では経験できない沢山の出会いが今の私を作っています。正直、この先の進路は決まっていますが、一度きりの人生、悔いのないようにこれからもチャレンジしていきたいと思っています。

（平成12年修士課程修了）

鈴木 嘉治（茨城県立中央病院薬剤局薬剤科・副薬剤科長）



執筆のご依頼を頂き、2001年2月15日号のNature誌「the human genome」を手にも、かずさDNA研究所内に設置された遺伝子創薬学研究室の門を叩いたことを思い出しました。当時、研究所内に学生が在籍することは珍しく、中山先生をはじめ、学習環境を整えてくださった関係の皆様には今でも感謝しております。マウスに囲まれた学生生活でしたが、先生方には制限なく議論にお時間を頂き、多くの要望も受け止めて頂きました。学友にも恵まれ、卒業後も学会で顔を合わせることができるのは非常に心強いつながりです。私は修士卒で研究室を離れ、臨床薬剤師として大病院へ就職しました。当時は基礎研究室出身者が病院に就職することを奇異に見られたものの、上司は私の背景をご理解くださり、1年目から遺伝子多型と薬物動態に関するテーマを与えて頂きました。その後、社会人博士課程へ入学し、何とか博士号を取得できました。博士課程に進もうと決断できたことも、診療科と共同して臨床研究を実施できていることも、かずさでトレーニングを受けた分子生物学の知識と技術があったことです。今は公的病院にてがん領域を専門とした業務を担当しておりますが、昨今のがんゲノム医療に代表されるように、まさに遺伝子の病気を相手に戦っております。自分に似た子供の顔を見てDNAの偉大さを感じながら、業界に少しでも恩返しができるよう臨床・教育・研究に走り回る日々を過ごしております。

（平成16年修士課程修了）

簾 貴士（医薬品医療機器総合機構）



私が博士課程を修了したのが2010年3月であり、もう10年以上の歳月が経ちました。本会員便り執筆の依頼を受け、薬友会報のバックナンバーを見直したところ、この10年の間に、学生の時にご指導いただいた先生方の多くが定年退職されており、また、亥鼻キャンパスに研究棟Ⅱが完成し、薬学部の西千葉キャンパスからの移転が完了しているなど、改めて時の流れを感じました。博士課程修了後の自分のことを振り返ると、医薬品医療機器総合機構（PMDA）に就職し、主に医薬品の安全対策業務に従事しながら、医薬品規制調和国際会議（ICH）の作業部会への専門家としての参加や、米国食品医薬品庁（U.S. FDA）への出向といった国際業務も担当するなど、様々な経験ができた期間だったと思います。PMDAには千葉大学薬学部を卒業した方、修了した方が多数在籍されており、日々の業務においてお世話になっております。また、現在のように新型コロナウイルス感染症が流行する前には、食事をしながら意見交換したりする機会もあったりと、業務以外での千葉大学薬学部関係者のつながりもあります。PMDAでは定期的に職員を募集しておりますので、このつながりに、新しい千葉卒生が加わっていただけることを期待しております。

（平成19年修士課程修了）

宇津 美秋（農業・食品産業技術総合研究機構・研究員）



私は、学部3年生の冬から博士課程3年生の間、臨床薬理学（旧・高齢者薬剤学）研究室にて難治性がんの抗がん薬耐性克服を目指して研究をしていました。学位取得後は、国立がん研究センター研究所にてがんの支持療法について2年間研究した後、農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）に異動し約3年が経ちました。農研機構では、取り扱いが容易で再現性に優れたヒト臓器の培養モデルの開発に取り組んでいます。文献或いは研究室の先輩のプロトコルに従って細胞培養実験をしたのに同じ結果が得られない、と悩んだ経験をお持ちの方も多いのではないでしょうか。研究者のそのような悩みを解決できるような技術を開発できるよう日々試行錯誤しています。

近況ですが、2021年9月に伊藤晃成先生が実行委員長を務められた第65回日本薬学会関東支部大会にてシンポジストとして発表させていただきました。初めてのシンポジウム発表が母校主催の学会ということで、とても感慨深い思いでした。また、本学会にて多数の千葉大学薬学部の現役学生が堂々と研究発表をしている様子を見て、彼らに負けないように自分もより一層頑張ろうという気持ちにさせてもらいました。基礎研究は思った結果が出ず辛いことも多いですが、同時にワクワクすることもたくさんあり、それを仕事として続けることができ幸せです。今後もその初心を忘れず、精進していきたいと思います。
(平成29年博士課程修了)

藤川 雄太（東京薬科大学生命科学部・助教）



2000年に入学し、4年次は遺伝子資源応用研究室（齋藤 和季先生）に所属しました。卒業後は他大学に進学し、ケミカルバイオロジー研究によって学位を取得いたしました。その後ドイツがん研究センターに3年弱留学し、現職に至っております。

初見の方に所属が東薬生命だとお伝えすると、9割がた「6年制薬学部での教育って大変ですねー」と労われ、「いやいや、生命科学部って薬学部じゃないんですよ」というやり取り（ツッコミ？）を交わします。そんな生命科学部は、薬学部とは雰囲気は全く違い、研究分野もまさにDiversityを地でやっているような場所です。僕自身は、細胞内の現象を可視化、操作するための新しいケミカルツールを開発し、これを創薬や基礎生物学へ応用するという研究をしています。しかしながら下の階では、免疫・発電菌・分子動力学計算・がん、隣では造血幹細胞を研究しているなど、研究分野は多岐にわたります。幸いにも優秀な学生さんと研究を一緒に行えることが多く、一喜一憂しながら日々研究を楽しんでいます。また数年前に、学部主催の高校生研究発表会を立ち上げました。これも未来の生命科学科学者を育てる一つの社会貢献の形となればと考えています。

アカデミアや企業などで活躍されている千葉薬出身者の方を知ると、嬉しくなりつつも、身が引き締まる思いです。卒業生の方々の今後のご活躍をお祈り申し上げます。
(平成16年卒業)

尾瀬 淳（旭化成ファーマ株式会社）



生物薬剤学研究室を卒業しちょうど20年が経ちました。そのうちの最初の3分の1は激動の期間でした。万有製薬（現MSD）に入社し、裁量労働制をうまく活用（！）しつつ非臨床薬物動態研究を3年ほど謳歌していましたら、東京大学分子薬物動態学教室への出向の指令を受けました。良い先生方・仲間にも恵まれ、学生に戻った気分で研究時々遊びに2年半打ち込めたことは幸運でした。このとき、伊藤晃成先生（当時は東大病院薬剤部でしたね）は博士論文の副査になってくださいました。

しかし一寸先は闇。薬物代謝（学生時）に加え、薬物トランスポーター（出向時）の世界最先端の研究を経験し、出向のチャンスをくださった会社に恩返しを！と燃えていたところに研究所の閉鎖が決まりました。これを機に臨床薬理職への転身を決め、2009年に旭化成ファーマへ移りました。その後は落ち着いた日々が続き、臨床薬理戦略の設定、Phase 1試験や臨床薬理試験の立案・実施、母集団解析、研究職の方々とTranslational Scienceに取り組む充実した日々を送っています。そういった環境を与えてくださる会社に感謝です。

大学で教鞭を執る同期達、アカデミアで業績を収めている同期達、製薬協など業界で著名な人物となった同期達の活躍を見聞きしますと、時間の流れを感じるとともに千葉薬のポテンシャルの高さを感じます。学生の皆様も千葉薬で学べることを誇りに感じつつ、この不確実性の高い社会に力強く飛び立ってほしいと願います。
(平成14年修士課程修了)

研究室便り

他の研究室は次号に掲載します

医薬品情報学

医薬品情報学研究室には、現在、特任教授の神崎哲人、特任准教授の鈴木聡子、特任助教の石田大祐、廣瀬慎一の教員4名と学部学生6名、事務補佐員1名が所属しています。

本研究室では、生活習慣病・動脈硬化症の臨床研究、医薬品の適正使用の調査研究などに取り組んでいます。具体的には、①生活習慣病の患者における多剤併用の実態に関する研究、②精神疾患患者の生活習慣病、動脈硬化性疾患及びその治療の実態に関する研究、③薬局における患者フォローアップの実態に関する研究などです。

また、(株)マツキヨココカラ&カンパニーの寄附講座である特徴を生かし、産学連携で臨床的研究を進めていますので、どうぞ気軽にお立ち寄りください。



活性構造化学

令和3年度は薬学科6年生1名、修士課程5名、博士課程2名の学生が卒業・修了しました。そのうち博士課程1名は、コロナ禍の中、タイより来日しダブルディグリーを取得しました。令和4年度のメンバーは、4年生4名、薬学科5年生1名、修士課程8名、博士課程2名で頑張っています。また、令和2年度より当研究室の准教授に高屋明子先生が着任し、研究室でこれまで蓄積した天然物ライブラリーと細菌感染症学とを組み合わせ合わせた研究など、新たな研究活動もスタートしています。今後も研究室一同、切磋琢磨しながら研究活動に励んでまいりますので、温かいご支援のほど何卒よろしくお願ひいたします。



実務薬学

当研究室は、令和4年度4月時点で教員2名、博士課程1名、修士課程2名、学部6年生1名、5年生2名、4年生4名の計12名が在籍しています。人数が増えて研究室が手狭になってきたことから、令和3年9月に医薬系総合研究棟1期棟2階に引っ越しを行いました。現在は広くなった研究室で日々研究に励んでいます。研究内容はクリニカルクエストをベースにして、医薬品の副作用のリスク因子に関する研究や抗菌薬・抗てんかん薬のTDMに関する研究などを行なっています。今後も研究活動を通じて、臨床現場で役立つエビデンスを創生すること、将来の薬物療法の要となる人材を育成することを目指して取り組んでいきます。



生化学

この2年間あまり、研究室に思うように来られなくなったり、学会がオンラインになったりと研究環境が以前とは変わりました。そんな中で、博士課程3名、修士課程5名、学部生6名が生化学研究室から巣立ち、現在国内外で新たな仕事や研究に取り組んでいます。また2021年度の後半からは新たに8名の学生が研究室に参加し、現在スタッフ含めて総勢39名で、細胞内のシグナル伝達、個体の老化・代謝・行動メカニズム解明、病態モデルの作製など幅広い研究テーマに取り組んでいます。

卒業生、在校生が生化学研究室で一堂に会して、研究やこれまでの日々について自由に語らうことができるようになる日が来るのを願ってやみません。



分子画像薬品学

本研究室は、3名の教員と博士課程1名、修士課程3名、学部学生12名、秘書1名の総勢19名で構成されています。今年度開始時は14名でしたが、10月より学部3年生5名が加わり、活気が増しています。研究は、がんの画像診断薬剤やアイソトープ治療薬剤の開発研究を進めており、これら研究の両輪を融合した theranostics (therapy + diagnostics) への展開も目指しています。また、最近では標的 α 線治療薬剤の開発研究にも取り組んでいます。当研究室で開発した薬剤を臨床応用まで進めることを目標に、日々研究活動に励んでおります。OB/OGの皆さま、いつでもお立ち寄り下さい。



分子心血管薬理学

当研究室では、①循環器疾患の病態解明とそれに基づいた新たな治療薬の開発、②がん細胞の増殖性や運動性に関わる新規制御因子の機能解析とそれに基づいた新たな治療薬の開発、の2本柱を主な研究テーマとして進めています。高齢化や生活習慣の欧米化により、わが国でも心不全患者やがん患者の数が増加しています。これまでたくさんの治療薬が開発され使われてきましたが、治療に反応せず改善がみられない患者はまだ多くいます。病気の進行を止めるような有効な治療薬を開発して社会に貢献したいと考えています。研究室メンバーは徐々に増えており、現在は医学部の疾患システム医学研究室や循環器内科学研究室と共同研究を進めています。



法中毒学研究室

2021年4月に本邦初の法中毒学を掲げた研究室として発足しました。法中毒学研究室では、1) 生体試料中の薬毒物の死後薬物動態の解明、2) 危険ドラッグや交通事故に影響を与える薬物の新規分析法の開発等の研究を行い、薬学部・医学薬学府における教育においては分析化学関連の講義と実習を担当しています。また研究・教育に併せて、医学研究院法医学教室と連携し、法医解剖及び検案に伴う薬毒物分析業務を行っています。現在、当研究室は、小椋康光教授と永澤明佳講師の2名体制で運営していますが、医学研究院附属法医学教育研究センターの先生方とも連携し、研究・教育・実務の観点から法中毒学分野の発展に貢献したいと思っています。



たに6名の学部3年生が配属となりました。2021年9月より、CREST「インセルNMR計測による細胞内蛋白質の構造・動態・機能解明」がスタートしました。また学術変革領域(A)「クロススケール新生物学」にも計画班として参画します。現在、千葉大学に新たにタンパク質解析用のNMR装置の導入を進めており、益々研究を活性化していきたいと思っています。引き続き、ご支援の程どうぞよろしくお願いいたします。



免疫微生物学

免疫微生物学研究室では、教員3名(川島、安保、高橋)、博士課程学生7名、修士課程学生10名、学部学生8名で、糖鎖生物学・免疫学・微生物学に関する分野横断的研究を展開しています。特に、抗糖鎖抗体の開発に基づいて展開する創薬研究に力を入れており、我々の研究成果が将来実臨床へ応用されることを夢見て、日々研究に励んでいます。中国・バンラデシュからの留学生が5名在籍し、英語が飛び交う国際色豊かな研究室で、皆で一丸となって研究に取り組んでいます。



薬物学

私達の研究室では、mRNAや核酸の送達技術の開発をすすめています。折しも、最近、新型コロナウイルスに対するRNAワクチンが承認され、これからRNA創薬は益々加速するものと考えられます。私達の研究室においても、独自の脂質様材料を基盤とした技術開発をすすめており、国内における共同研究も多くなってきました。国産のRNA創薬の実現に向けて貢献できればとおもっております。一方、千葉大学には六年間にわたり御世話になりましたが、本研究室を主宰していた秋田は2021年度をもちまして退官し、東北大学にて研究室を立ち上げることとなりました。引き続き、私の後任の教授の先生とも連携し、今後ともDDS研究を邁進してまいりたいとおもいます。



薬効薬理学研究室

当研究室は2022年2月時点で、教員2名、博士課程学生3名、修士課程学生5名、学部生11名、補佐員2名で構成されています。2021年3月に村山俊彦教授が定年退職され、4月には中村浩之准教授が教授に昇任し、新体制で活動をしています。研究内容は引き続き、セラミドの生理機能解析を基盤として各種疾患の病態解明および新規創薬標的の探索研究を進めています。9月には第65回日本薬学会関東支部大会にて、修士課程2年生の風間皓大君と学部6年生の茂木雛子さんが優秀発表賞を受賞しました。昨今は新型コロナウイルスの影響で研究室旅行や飲み会が制限されておりますが、終息した際には大いに盛り上がりたいたいと考えております。卒業生の皆様、どうぞお気楽にお立ち寄りください。



予防薬学

令和4年度は、教員4名、博士課程4名、修士課程4名、6年生4名、5年生2名、4年生6名、研究生1名、技術補佐員1名、事務補佐員1名の総勢27名となりました。また昨年度まで博士研究員として在籍していた高橋一聡さんが、今年度より千葉大学大学院園芸学研究院にて助教として研究活動を開始されています。学会活動としては、7月11日～14日に金沢市にてThe 8th International Symposium on Metallomics (ISM-8)を主催します。海外からの参加者の入国など難しい状況ではありますが、予防薬学研究室として主催する初の国際学会を活気ある学術集会にしたいと思っています。



薬品物理化学

薬品物理化学教室では2021年4月に助教として趙慶慈先生が着任し、教員3名、博士課程3名、修士課程6名、学部生10名、研究生1名で活動をしています。10月からは新

学部だより

教員の人事異動

◎採用者

R 3.6.1	塩見 慎也	国際創薬学	特任助教（東北大学 助教より）
R 4.4.1	高倉 勇氣	分子心血管薬理学	特任研究員（理化学研究所より）
R 4.4.1	中司 寛子	免疫微生物学	准教授（慶應義塾大学 助教より）
R 4.4.1	甘中 健登	分子画像薬品学	助教（神戸薬科大学 大学院生より）

◎辞職

R 4.3.31	高橋 耕太	国際創薬学	特任助教（University of Strasbourg Postdoctoral fellowへ）
R 4.3.31	秋田 英万	薬物学	教授（東北大学 教授へ）

◎昇任

R 4.4.1	畠山 浩人	薬物学	教授（臨床薬理学 准教授より）
---------	-------	-----	-----------------

第107回 薬剤師国家試験合格状況

令和4年2月19日、20日

新卒者合格率 92.5%（受験者40名、合格者37名）

本学科目等履修生合格率 0%（受験者5名、合格者0名）

2021年度 卒業生・修了生の進路

学部4年生 40名

進 学：千葉大学大学院医学薬学府修士課程、東北大学大学院薬学研究科博士課程前期課程

学部6年生 41名

進 学：千葉大学大学院医学薬学府博士課程

企 業：日本調剤(株)、ライオン(株)、中外製薬(株)、IQVIAサービシーズジャパン(株)、
(株)アインホールディングス、大日本住友製薬(株)、雪印メグミルク(株)、持田製薬(株)、東ソー(株)、
サラヤ(株)、ファイザー(株)、塩野義製薬(株)、クオール(株)、(株)オール・プラン社、大鵬薬品工業(株)、
日本メジフィジックス(株)、(株)フロンティア、ノボ・ノルディスク・ファーマ(株)

病 院：千葉大学医学部附属病院、横浜旭中央総合病院、森山記念病院、岩手医科大学附属病院、
静岡県立静岡がんセンター、浜松医科大学医学部附属病院、国立国際医療研究センター病院、

公 務 員：東京都、新潟県

そ の 他：医薬品医療機器総合機構

修士課程 50名

進 学：千葉大学大学院医学薬学府博士課程、千葉大学薬学部科目等履修生医療薬学専修コース

企 業：アステラス製薬(株)、武田薬品工業(株)、第一三共(株)、IQVIAサービシーズジャパン(株)、大鵬薬品工業(株)、
日本メジフィジックス(株)、シミック(株)、エイツーヘルスケア(株)、テクノプロR&D、マルホ(株)、
(株)新日本科学PPD、コトヒラ工業(株)、積水メディカル(株)、日本イーライリリー(株)、
ヤスハラケミカル(株)、JCRファーマ(株)、陽進堂、興和(株)、久光製薬(株)、中外製薬(株)、
バーチャレスク・コンサルティング(株)、(株)ADEKA、Pwcコンサルティング、生化学工業、
杏林製薬(株)、イーエヌ大塚製薬(株)、イーピーエス(株)、マイクロンメモリジャパン、佐藤製薬(株)、
キッセイ薬品工業(株)、日本新薬(株)、IQVIA Medical Development Co.Ltd (Dalian)

博士課程 20名

企 業：プリストル・マイヤーズスクイブ、帝人ファーマ(株)、小野薬品工業(株)、MSD(株)、第一三共(株)、
(株)三和化学研究所、アステラス製薬(株)、DIC(株)、マルホ(株)、ゼリア新薬(株)、エーザイ(株)、
(株)医学生物化学研究所、広栄化学工業(株)、

そ の 他：国立大学法人千葉大学、星薬科大学、名古屋市立大学、
バジャジャラン大学 (Universitas Padjadjaran)、横浜市立大学附属病院

2022年度 薬学部入学者の状況

入学者96名（男48名、女48名：推薦10名、帰国生徒1名、前期73名、後期12名、私費0名）

出身高校一覧

札幌開成（北海道）、秋田（秋田）、能代（秋田）、長岡（新潟）、新潟（新潟）、伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育（群馬）、太田女子（群馬）、前橋（群馬）、前橋女子（群馬）、下妻第一（茨城）、竹園（茨城）、市立浦和（埼玉）、大宮（埼玉）、開智（埼玉）、川越東（埼玉）、県立川越（埼玉）、所沢北（埼玉）、柏南（千葉）、鎌ヶ谷（千葉）、県立千葉（千葉）、県立船橋（千葉）、国府台（千葉）、佐倉（千葉）、昭和学院秀英（千葉）、津田沼（千葉）、東邦大学付属東邦（千葉）、日本大学習志野（千葉）、東葛飾（千葉）、大妻中野（東京）、海城（東京）、北園（東京）、国分寺（東京）、国立（東京）、小松川（東京）、駒場東邦（東京）、頌栄女子学院（東京）、女子学院（東京）、竹早（東京）、立川（東京）、戸山（東京）、豊島岡女子学園（東京）、公文国際学園（神奈川）、相模原（神奈川）、逗子開成（神奈川）、桐光学園（神奈川）、横浜平沼（神奈川）、松本深志（長野）、県立富士（静岡）、清水東（静岡）、浜松西（静岡）、津（三重）、天理（奈良）、広島大学附属福山（広島）、福岡大学附属大濠（福岡）、青雲（長崎）、鶴丸（鹿児島）
（掲載について承諾を頂いた方の出身校名のみ掲載しております。）

2022年度 大学院医学薬学府入学者の状況（4月入学者）

修士（薬学領域）入学 45名：総合薬品科学専攻45名
博士（薬学領域）入学 13名：先端医学薬学専攻（4年制） 3名
先端創薬科学専攻（3年制） 10名

2021 年 の 受 賞 記 録

【教員の受賞】

令和3年3月	原田 慎吾	薬化学	日本薬学会奨励賞
令和3年4月	石川 勇人	中分子化学	長瀬科学技術振興財団2021年度長瀬研究振興賞
令和3年6月	田中 佑樹	予防薬学	プラズマ分光分析研究会奨励賞
令和3年6月	田中 佑樹	予防薬学	文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究「生命金属科学」 第1回若手優秀研究発表賞
令和3年8月	西田 紀貴	薬品物理化学	日本核磁気共鳴学会進歩賞
令和3年9月	殿城亜矢子	生化学	全米医学アカデミー Healthy longevity Global Competition, Catalyst Award
令和3年10月	青木 重樹	生物薬剤学	日本毒性学会技術賞
令和3年11月	竹村 晃典	生物薬剤学	日本薬物動態学会第36回年会ベストポスター賞
令和3年11月	青木 重樹	生物薬剤学	日本薬物動態学会第36回年会ベストポスター賞
令和3年11月	根本 哲宏	薬化学	千葉大学先進学術賞
令和3年12月	中島 誠也	薬化学	有機合成化学協会研究企画賞
令和3年12月	竹村 晃典	生物薬剤学	第4回医薬品毒性機序研究会若手優秀発表賞

【学生の受賞】

令和3年3月	沢田 美冬	医療薬学	日本薬学会第141年会優秀発表賞
令和3年3月	伊藤 翼	薬化学	日本薬学会第141年会優秀発表賞
令和3年3月	蒔田 吉功	活性構造化学	日本薬学会第141年会優秀発表賞
令和3年3月	大森 将貴	製剤工学	日本薬学会第141年会優秀発表賞
令和3年3月	大嶋 紬	製剤工学	日本薬学会第141年会優秀発表賞
令和3年3月	込山 大智	免疫微生物学	日本薬学会第141年会優秀発表賞
令和3年5月	江寺 理紗	製剤工学	日本薬剤学会第36年会最優秀発表賞
令和3年5月	大森 将貴	製剤工学	日本薬剤学会第36年会最優秀発表賞
令和3年5月	大谷 あさ	薬物学	日本薬剤学会第36年会最優秀発表賞
令和3年6月	坂元寿輝弥	中分子化学	日本薬学会化学系薬学部第19回次世代を担う有機化学 シンポジウム優秀発表賞
令和3年6月	込山 大智	免疫微生物学	第21回Pharmaco-Hematologyシンポジウム優秀発表賞

令和3年6月	大石かなえ	免疫微生物学	第21回Pharmaco-Hematologyシンポジウム優秀発表賞
令和3年6月	大山遼太郎	薬物学	第37回日本DDS学会学術集会優秀発表賞
令和3年6月	神 亮太	臨床薬理学	第28回HAB研究機構学術年会ベストポスター賞
令和3年6月	白柳 智弘	生物薬剤学	第28回HAB研究機構学術年会ベストポスター賞 1st prize
令和3年7月	貝塚 祐太	分子画像薬品学	第58回アイソトープ・放射線研究発表会若手優秀講演賞
令和3年7月	岩瀬真喜子	予防薬学	プラズマ分光分析研究フラッシュプレゼンテーション賞
令和3年7月	池山 佑豪	生物薬剤学	第48回日本毒性学会学術年会学生ポスター発表賞
令和3年8月	貝塚 祐太、	市橋 莉大	第19回なのはなコンペ2021なのはな賞最優秀賞
令和3年8月	貝塚 祐太、	市橋 莉大	第19回なのはなコンペ2021特別賞日本インサイトテクノロジー賞
令和3年9月	山中 夏樹	分子画像薬品学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	池山 佑豪	活性構造化学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞
令和3年9月	大島 太一	生物薬剤学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞
令和3年9月	木村 涼那	生物薬剤学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞
令和3年9月	木村 涼那	生化学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	安高 理裕	中分子化学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	寺田 菜摘	分子心血管薬理学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	矢澤 智弘	薬化学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	大山遼太郎	薬物学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	萩原 伸哉	薬物学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	石倉 晨規	免疫微生物学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞
令和3年9月	風間 皓大	薬効薬理学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞
令和3年9月	茂木 雛子	薬効薬理学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀ポスター発表賞
令和3年9月	神 亮太	臨床薬理学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和3年9月	渡邊 一樹、	前嶋 乃理絵、	島田 一秀、大林 ひかり
令和3年10月	中村 文香	薬品物理化学	第65回日本薬学会関東支部大会優秀発表賞
令和3年10月	桑原 るり	活性構造化学	日本生薬学会第67回年会優秀発表賞
令和3年10月	吉川 悦司	活性構造化学	第23回天然薬物の開発と応用シンポジウム優秀発表賞
令和3年10月	吉川 悦司	製剤工学	粉体工学会第38回製剤と粒子設計シンポジウムベストプレゼン賞
令和3年10月	土井 瑞貴	薬物学	第42回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム優秀発表賞
令和3年10月	堀合 咲慧	薬物学	日本微量元素学会優秀演題賞
令和3年10月	堀合 咲慧	予防薬学	メタルバイオサイエンス研究会学生賞
令和3年10月	関根亜由美	予防薬学	
令和3年11月	ジョーンズヘイリーさくら	臨床薬理学	第36回日本薬物動態学会年会ベストオーラル賞
令和3年12月	保月 静香	臨床薬理学	第42回日本臨床薬理学会学術総会優秀演題賞

成績優秀賞・論文優秀発表賞

学長表彰

広瀬 峻平 佐久間 文絵

学部長表彰

佐久間 文絵（薬科学科4年生） 萩原 伸哉（薬学科6年生）

薬学科卒業論文発表会 優秀発表賞

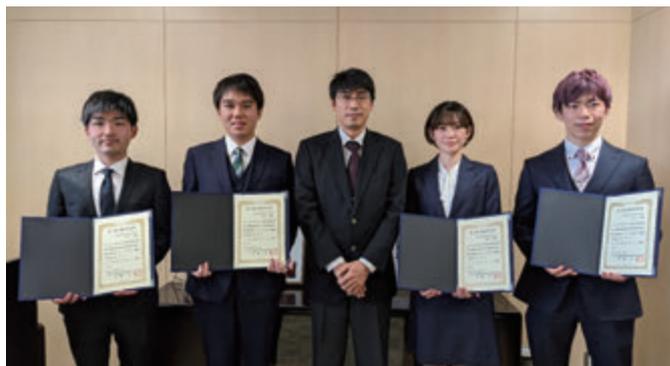
青木 春菜 桑原 るり
萩原 伸哉 藤田 翔也

修士論文優秀発表賞

竹中 浩貴 込山 大智
新井 健太 池田 結菜
ジョーンズヘイリーさくら（9月修了）

学府長表彰

広瀬 峻平（修士課程） 野口 裕生（博士課程）



修士論文優秀発表者

薬友会より

ご寄付いただいた皆様

令和3年度も薬友会の活動にご賛同いただき、多くの皆様からご支援をいただきました。皆様のご協力に深く感謝を申し上げますとともに、ここに寄付をいただいた方々のお名前を掲載させていただきます。

(五十音順、敬称略)

相見 則郎	安食 親孝	伊佐 常健 ※ (故人 送金は奥様の鈴枝様より)	
石井 靖男	岩崎 吉宏	遠藤 裕久	岡田 清三郎
日下 秀昭	久野 美和子	小島 政彦	小島 俱子
斎田 澄江	齊藤 和季	佐々木 章子	高橋 明
高橋 惇	長尾 靖子	中嶋 啓介	中田 正子
中村 伸子	那波 勝義	那波 恒子	西原 尚史
根矢 三郎	野口 雅利	古田 尚平	村瀬 一郎
山川 雅延	吉木 康雄	脇野 春子	

(お名前の公表を希望されていない方につきましては、掲載しておりません。)
今後も、皆様方の温かいご支援を何卒よろしくお願いいたします。

<ご寄付のお願い>

薬友会のさらなる活性化のため、ご寄付をお願い申し上げます。

一口2千円から随時受け付けています。同封の振込用紙に、①氏名、②住所、③卒業年度をご記入ください。

■郵便局より振込の場合

振替口座 00150-5-551796 千葉大学薬友会

■他金融機関より振込の場合

銀行名：ゆうちょ銀行	店名：〇一九 (ゼロイチキュー店)	店番：019
預金種目：当座	口座番号：0551796	口座名：千葉大学薬友会

<薬友会ホームページ>

薬友会ホームページ (<https://yakuyukai.net>) には、同窓会開催のお知らせや薬友会情報などを掲載しております。情報掲載のご希望は、下記の薬友会事務局までご連絡ください。

今年度よりホームページから会員情報変更が可能になりました。<https://ours1.net/yakuyukai>(下記QRコード) にアクセスして頂くか、または薬友会ホームページの「住所変更」から、下記のIDおよびパスワードを入力してお入りください。従来通り、同封のハガキおよびEメールによるご連絡も可能です。

ID：●●●●●●●●●●

パスワード：●●●●●●●●



変更連絡フォーム

薬友会事務局連絡先

【Eメール】 yakuyukai@chiba-u.jp

【F A X】 043-226-2930

<令和4年度各種委員会名簿>

(○印：委員長。前委員長はアドバイザーとして参画。)

総務委員会 ○伊藤 晃成、青木 重樹、竹村 晃典、村上 泰興 (S36)、佐藤 信範 (前委員：アドバイザー)

財務委員会 ○高野 博之、関根 祐子、山口 憲孝、石川 雅之、村上 泰興 (S36)、

森部 久仁一 (前委員長：アドバイザー)

名簿委員会 ○山崎 真巳、吉本 尚子、村上 泰興 (S36)、根本 哲宏 (前委員長：アドバイザー)

事業委員会 ○石橋 正己、高屋 明子、原 康雅、樋坂 章博 (卒後教育研修担当)、

西田 紀貴 (前委員長：アドバイザー)

広報委員会 ○小椋 康光、鈴木 紀行、福本 泰典、田中 佑樹、樋坂 章博 (前委員長：アドバイザー)

第30回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日 時：2022年7月9日（土） 13：30～16：30
場 所：千葉大学薬学部120周年記念講堂（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）
（〒260-8675 千葉市中央区亥鼻1-8-1）
（※）対面およびオンラインとのハイブリッド開催

主 催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会
テ ー マ：「薬学の世界2022」

生涯教育セミナー

- 1) 「連続照射マイクロ波と金属ナノ粒子触媒を用いる反応開発と医薬化学研究への応用」
有澤 光弘 先生（大阪大学 大学院薬学研究科 医薬合成化学分野 教授）（薬友会員 H6卒）
- 2) 「薬剤師に期待される口腔ケアにおける役割」
山浦 克典 先生（慶應義塾大学 薬学部 医療薬学・社会連携センター社会薬学部門 教授）
（薬友会員 H1卒）
- 3) 「大学発イノベーションへの期待 ～学術研究推進（入口側）から産学連携、
大学発スタートアップ経営、ベンチャー投資（出口側）までの実務経験の視点より～」
片桐 大輔 先生（千葉大学 学術研究・イノベーション推進機構（IMO）特任教授）（薬友会員 H13卒）

宮木高明記念講演会

「多成分系、新規天然物医薬品への道」
合田 幸広 先生（国立医薬品食品衛生研究所 所長）

セミナー参加費 無料

（※）対面での参加申込み 不要（当日お越しください）
オンラインでの参加 薬友会ホームページ（<https://yakuyukai.net/>）にてご確認ください

お問い合わせ先 薬学研究院 活性構造化学研究室 石橋正己
（電話/FAX：043-226-2923 email: mish@chiba-u.jp）

薬剤師卒後教育研究講座開催のお知らせ

本講座は薬剤師の生涯教育を目的とする勉強会です。また、在学生を含めてどなたでも参加できます。千葉大学大学院薬学研究院・薬友会・医学部附属病院薬剤部・千葉県病院薬剤師会が共催します。令和4年度の開催計画は次の通りです。

- 第120回 2022年5月14日（土）オンライン開催、薬局での検査値活用、緩和医療、糖尿病治療など。
講師：坂田 祐樹（あさみ薬局、北海道）、内海 尊雄（千葉大学病院、薬剤部）、
小野 啓（千葉大学病院、糖尿病・代謝・内分泌内科）
参加費2000円・学生無料、事前予約制となります。
日病薬病院薬学認定薬剤師認定シール〈Ⅲ-1病棟・外来業務（医療コミュニケーション）0.5単位、
Ⅲ-2連携 0.5単位、V-2疾病・薬物療法 0.5単位〉を、それぞれ申請中です。

詳細は薬友会と臨床薬理学研究室（旧：高齢者薬剤学）のホームページに掲載します。また、臨床薬理学研究室のホームページ<http://www.p.chiba-u.jp/lab/cpp/seminar.html>ではこれまでの活動をご覧いただけます。

ご不明な点は臨床薬理学 佐藤洋美（TEL：043-226-2879）までお問い合わせ下さい。

編集後記

薬友会報の編集を無事に終えることができ、お力添えをいただいた方々に感謝申し上げます。コロナ禍もはや2年半となり、オンラインでの講義や学会なども既に日常の一部となった感もあります。薬友会の活動についても中々思うに任せない期間も長くなっておりますが、薬友会報で薬学部や卒業生の近況を少しでもお届けできれば幸いと思い、今回、薬友会報をフルカラーにいたしました。表紙の写真にて紹介しましたとおり、正門とバス停の移転、周辺の歩道整備、治療学研究棟の建設、キャンパス内のバリアフリー化など、亥鼻キャンパスは大きく変容しております。コロナ禍が落ち着きましたら、ぜひ亥鼻キャンパスにお立ち寄りください。

広報委員会 会報担当部門 小椋康光（委員長）、鈴木紀行、福本泰典、田中佑樹、樋坂章博（前委員長）